



こんぴらさん障壁画の謎

—若沖・岸岱をめぐって—

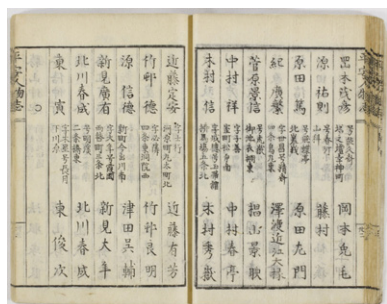
【第12章】

岸岱の門人・岸光について

『金光院日帳』には岸岱の門人として有芳、岸光の2人が記される。奥書院の「春の間」「菖蒲の間」「柳の間」に岸岱の落款、杉戸や引違襖に有芳の落款は認められるが、奥書院障壁画に岸光の落款は認められない。

有芳は岸派一門の近藤有芳であり、『平安人物志』文政13年版(1830)に[近藤定安 字士行 河原町丸太町西 近藤有芳]、天保9年版(1838)に[近藤定安 字士行 河原町丸太町北 近藤有芳]と掲載されている。

近藤有芳(生没年不詳)は、名は秀、字は士行・士馨・伯仁、号は千里館、定安・雅楽と称した画家で岸岱及び白井華陽に学んだ。



平安人物志(京都府立京都学・歴史館蔵)
天保9年版 画の部

岸光は岸姓を名乗っているが岸派の画家に該当する名はみあたらない。そこでこれまで取り上げられることがなかった岸光について考察してみたい。

金毘羅の絵図としては、延宝年間(1673~1681)、象頭山と門前町の景観を12の景勝に分けて制作した、狩野常真筆《象頭山十二境図巻》、狩野安信・狩野時信筆《象頭山十二景図》が最初といえる。弘化2年(1845)3月には金堂落慶・開帳を祝して《象頭山八景》²⁾が出版された。参詣客への観光案内・土産用に売られたであろうこの八景図は、8枚1組で、それぞれの図に詩と和歌の讃を付した寄合書きの画帖である。これの挿図を担当した画家の中に、岸岱、有芳、岸弘の名がみえる。

『こんぴら絵図展』(財団法人平木浮世絵財団、1985)に《象頭山八景》が掲載されており、出品目録に、題名、絵師、版元、寸法(cm)、所蔵の順に記してある。

《象頭山八景》表紙、孔直、成功堂

「象頭山八景」(1)圓亀津客船、公圭、成功堂、18.4×25.4、菅納彰次氏
「象頭山八景」(2)飯野山積雪、岸岱、成功堂、18.4×25.4、菅納彰次氏
「象頭山八景」(3)二本樹春風、岸弘、成功堂、18.4×25.4、菅納彰次氏

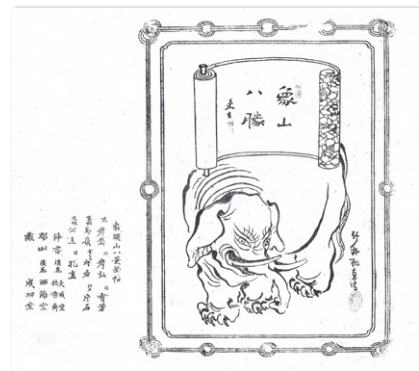
「象頭山八景」(4)清氏塚秋雨、此君、成功堂、18.4×25.4、菅納彰次氏
「象頭山八景」(5)愛宕峰朧月、馬嶺、成功堂、18.4×25.4、菅納彰次氏
「象頭山八景」(6)興泉寺鳴鐘、有芳、成功堂、18.4×25.4、菅納彰次氏
「象頭山八景」(7)満濃池遊鶴、孔直、成功堂、18.4×25.4、菅納彰次氏
「象頭山八景」(8)打越坂夕陽、片石、成功堂、18.4×25.4、菅納彰次氏

それぞれの図、歌、詩の担当は以下の通りである³⁾。

- (1)圓亀津客船 絵・上田公圭 歌・吉田蕃教 詩・金陵(宥怡)
- (2)飯野山積雪 絵・岸岱 歌・友安三冬 詩・三野謙谷
- (3)二本樹春風 絵・岸弘 歌・吉成好謙 詩・三井雪航
- (4)清氏塚秋雨 絵・澤井此君 歌・佐陀幾与 詩・尾池梅隠
- (5)愛宕峰朧月 絵・中川馬嶺 歌・春樹 詩・象岳(宥黙)
- (6)興泉寺鳴鐘 絵・有芳 歌・香西一執 詩・山田梅村
- (7)満濃池遊鶴 絵・孔直 歌・宥瑜 詩・友安三冬
- (8)打越坂夕陽 絵・片石山樵 歌・鈴木資深 詩・久家暢斎

香川県立図書館と丸亀市立図書館に所蔵されており、香川県立図書館蔵の表紙をみると、

枠内に象が描かれ、



象頭山八景 表紙(香川県立図書館蔵)

竹外孔直写

象山

八勝

東生

枠外には

象頭山八景画帖

京岸岱 同岸弘 同有芳

高松馬嶺 金比羅此君 江戸片石

大坂公圭 同孔直

浄書 浪花 太盛堂
社書齋

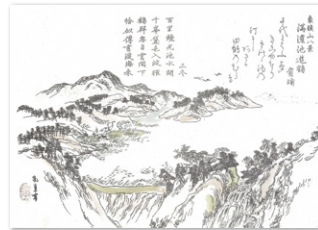
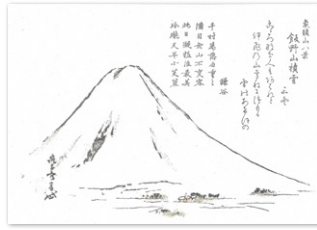
彫刻 浪花 西海堂

蔵 成功堂

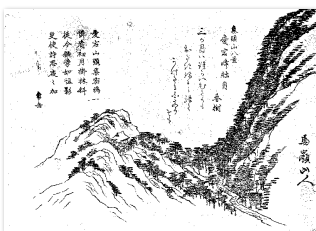
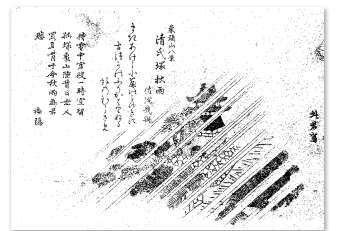
と記される。



それぞれの所蔵史料は、香川県立図書館はA図・B図、丸亀市立図書館はB図(有芳図はA図と同様)・C図(岸弘図はB図と同様)のものがみられる。



A図(香川県立図書館蔵)



B図(香川県立図書館蔵・丸亀市立図書館蔵)



C図(丸亀市立図書館蔵)



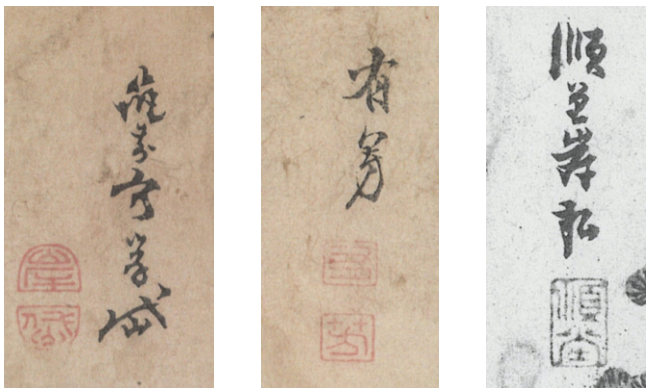
二本樹春風の図には「順堂岸弘」の署名と下部に印章がみえる。

A図、B図では印章がはっきりしないが、C図では、岸岱、有芳の印章が確認できる。

落款 「筑前介岸岱」、印章「岸」朱文半円印「岱」朱文半円印

落款 「有芳」、印章「有」朱文方印「芳」朱文方印

落款 「順堂岸弘」、印章「順堂」(朱文)方印(おそらく朱文であろう)



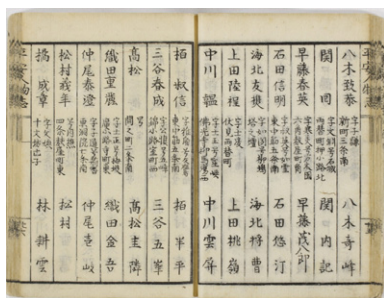
岸順堂



岸順堂筆 東下り図 絹本淡彩 98.0×36.3

この《象頭山八景》二本樹春風の挿図を描いた「順堂岸弘」が『金光院日帳』に記される岸岱の門人・岸光ではないだろうか⁴。

岸派のなかで岸弘といえば岸順堂という人物がみられる。嘉永5年(1852)版の『平安人物志』に「関回 字文淵号石城 両替町押小路北 関内記」と改名後の名が掲載されている。



平安人物志(京都府立京都学・歴史館蔵) 嘉永5年版 画の部

岸順堂

岸駒門、文化7年(1810)石城郡永崎村(現福島県いわき市永崎)に油屋を営む佐藤忠次衛門の末子として生まれる。姓は佐藤氏のちに小松氏、名は弘、号は龍鼻館など。『天開翁略年譜全』によれば、天保2年(1831)佐藤亀之進が門人となり磐山を名乗り、天保9年(1838)12月5日、岸駒が卒去し本禅寺に葬られた25日の翌日、岸家の一族になし順堂岸弘と名付けられる。後に弘化4年(1847)関石城と改名し、郷里石城へ戻り、造り酒屋を営む小松家の養子となる。晩年、石城の岸駒と賞された。明治15年(1882)10月2日没し、建乗院に葬る⁵。



関石城筆 波濤鷲図屏風 紙本墨画 165.3×180



磐山(岸順堂)筆 虎図 絹本着色 40.6×57.0 天保7年(1836)

(図録「企画展 岸派とその系譜－岸駒から岸竹堂へ－」(栗東歴史民俗博物館より転載))



岸派が他流派と異なる点は他流派が血脈を保守して存続を図るのに対し、優秀な門人を一族に迎え入れるという実力主義を第一とする点であるという。

天保9年(1838)から順堂岸弘を名乗って弘化4年(1847)に関石城に改名しており、奥書院障壁画制作時の天保15年(1844)時点の名は順堂岸弘である。

明珍健二氏によると、天保10年(1839)近江八幡市永原の「山中屋」三男・山中東江は15歳のとき岸順堂を迎え絵を学ぶようになり、弘化元年(1844)に岸順堂の推挙によって岸連山の門下となる。山中東江がなぜ順堂の元から連山の元へと移ったかは詳らかでないという⁶。

天保15年(1844)は、岸順堂が岸岱とともに金毘羅へ出向いた同時期で、これが何かしら関係したのか連山に推挙する契機となったのかもしれない。

奥書院障壁画に岸順堂の落款がないため断定はできないが、《象頭山八景》の挿図から、岸岱が帯同させた門人の岸光とは岸順堂(順堂岸弘)その人と推定し、後証を待つことにしたい。

¹ ⑥『金刀比羅宮の名宝—絵画』p.392 (143近藤有芳筆「瀧鷲図白椿飛鳥図杉戸絵」岩竹影子解説を引用)

² ①松原秀明「こんぴら絵図について」

当局の日記には「断れない先から象頭山八景之図の摺物を売広めたいと申込みがあったので、これまで絵図を売っていた吉田屋安兵衛後家方で売らせることにした」とある。

⑤『町史ことひら 4』p.407のほか、②『町史ことひら 5』pp.40-41に岸岱の弟子岸孔・有芳として紹介されている。

³ ⑥『町史ことひら 4』pp.407-411

上田公圭は上田公長の長子、孔直は長山孔寅の門人で大坂の画家、片石は戸塚茗溪と思われる。澤井此君は梶原竹軒『讃岐人名辞書』(高松製版印刷所、1928)に「號此君、天保頃象頭山人、○書画及俳句を能くす。」とある。

⁴ ①松原秀明「こんぴら絵図について」も従行してきた弟子の岸孔と認めている。

⁵ ③「企画展 岸派とその系譜—岸駒から岸竹堂へ—」(栗東歴史民俗博物館 1996) p.45を引用

⁶ ④明珍健二「山中東江絵画資料について」『岸派とその系譜—岸駒から岸竹堂へ—』pp.78-79

参考文献

①松原秀明「こんぴら絵図について」『こんぴら絵図展』平木浮世絵財団、1985

②『町史ことひら 5 絵図・写真 編』琴平町、1995

③「企画展 岸派とその系譜—岸駒から岸竹堂へ—」栗東歴史民俗博物館、1996

④明珍健二「山中東江絵画資料について」(同書所収論文)

⑤『町史ことひら 4 民俗・史跡・碑・文化財・人物 編』琴平町、1997

⑥『金刀比羅宮の名宝—絵画』金刀比羅宮、2004